

25. ダマ・デ・ノケ (ミンダナオ)

大変な昔、豊かで力のあるスルタンは、彼の女王が彼らのたったひとりの子ども、プトリ・ツンバ・ナミという名前の娘が生まれた時、わくわくしていました。

ところがスルタンの喜びは、占い師が宮殿で、王女は結婚する年齢になった時、その地の庶民と出会い、恋に落ちる、と宣言して、気持ちが曇らされてしまいました。

この知らせはスルタンと彼の女王を怖がらせました。彼らは愛する娘に最高のことだけを望んでいたのです。彼らは娘に、だれか、上流の生まれで、威厳のある家庭の伝統を継承してもらいたいのです。もし、王女が、純朴で貧しい男と結婚したら、国王と王国の将来は、脅かされる、と考えたのです。

占い師の預言が実現することを阻止する試みに、スルタンは王家の子どもの誕生を国民に秘密にしました。彼は娘を、他の世界から分離して、育てる決心をし、秘密の熱帯の邸宅に閉じ込めました。そのため、彼女はよその人に出会うことができませんでした。

スルタンと彼の女王にはほかに子どもはできませんでした。その間に、彼らの娘は、隔離された邸宅で育ち、忠実な召し使いが世話をしましたが、その人だけが、宮殿以外で、王女が存在を知っていたのです。

しかし、王女は大変悲しい、ひとりぼっちの人間に成長しました。彼女の両親は時々訪ねて来ましたが、彼女は孤児のように、母と父の恒常的な愛も、世話も、心遣いもなく育ちました。スルタンと女王は、彼らの娘を心から愛していましたが、危険を冒して秘密の邸宅を明らかにしたり、恐ろしい預言を遂行することはできませんでした。

プトリ・ツンバ・ナミは、秘密の邸宅の拘束された囚人でした。彼女は自分の時間を、織物、読書、そして小さな美しい庭に座って、色鮮やかな花の香りを嗅いだり、鳥のさえずりを聞いたり、蝶がはばたくのを見ていました。彼女の召し使いは親切でよい人でしたが、あまり教育も受けていませんでしたし、旅行もしていませんでしたので、王女との会話は限界があり、繰り返しが多かったのです。そして、その召し使いは、彼女の別の毎日の仕事にも忙しくしていたのです。

ひとりぼっちの王女は、読書と織物を続けることで時間を消化していました。読んでは織り、織っては、読んで、孤独な時間に時間を、日に日を、週に週を、月に月を、年に年を重ねて行きました。彼女は、面白い人と会話をすることを切望していました。

王女は結婚する年齢になるまでに、邸宅の小さな庭はいろんなものが育ちすぎて、座る場所を見つけないのもむずかしくなりました。トゲのある草やシダが育ちすぎて、美しい植物や花の成長を抑えてしまっていました。

王女は、召し使いに、彼女のために、誰か庭の世話をする人を見つけて、前の美しさに戻すように頼みました。最初、召し使いは王女の希望に従いたくありませんでした。秘密の邸宅に、よそ者を入れることによる結果を恐れたのです。彼女も、スルタンや女王が、そのようなことが起こるのを許さないことを知っていたのです。

しかし王女は召し使いに必死で願いました。「庭は、私の生活に喜びを与えてくれる数少ないものの一つです。それを私から奪わないで下さい。」

召し使いは王女が気の毒になりました。彼女は心ならずも、スルタンや女王に知らせず、王女の愛する庭を世話する庭師を見つけるために、最も近い村へ行きました。

ある朝、王女は夜の眠りから覚めた時、庭から不思議な音が聞こえて来ました。最初、彼女はそれを鳥の甘いさえずりだと思いましたが、しかし、そうではありませんでした。誰かが陽気な旋律の口笛を吹いていたのです。そして、彼女の召し使いは口笛の吹き方を知りません。

王女はベッドから飛び起きて、窓まで走りました。そこからは庭が見渡せて、誰が、あるいは何が、このただならぬ、美しい音を立てているのか見ようと思ったのです。彼女がびっくりして、心ウキウキと驚いたことには、すてきな若い男性が口笛を吹きながら、トゲのある草を刈って、仕事をしていたのを見たのです。

王女は、このすてきな見知らぬ人、違うもうひとりの人間と話したいと思いました。彼女はすぐに服を着て、庭へ走り、そこで庭師に近づいて、思い切って言いました。「おはようございます。」

庭師は、彼の前に立っている王女の美しさに、すぐに口笛をやめました。彼のような身分の低い者に、王家の美しい女性が話しかけることなど、

フィリピンの神話と伝説

信じられませんでした。彼はおじぎをするか、立ち去るか、決めかねていました。彼は決断して、おじぎをし、王女の手で穏やかに口づけをしました。「おはようございます。王女様。」と彼は恥かしそうに言いました。

王女は、他の人間の声を聞いて、大変うれしくなり、すぐに、庭師の横に座りました。「どうぞ、私に話してください。」彼女は庭師に促しました。「私に話してください。あなた自身のことや、あなたの子どもの時のこと、あなたが来た村のこと、あなたの知っている人々のこと、あなたの訪ねた場所のこと、あなたの仕事のことあなたの家族のこと、私にすべて話してください。」

困惑した庭師は、王女に、どこから話したらいいか、どのように話すべきか困惑していました。しかし、彼はすぐに、恥かしさや不器用さを克服して、彼の生活について、話し始めました。王女は座って、この素朴な男の口から出る言葉に興味をそそられました。彼女は頭を腕の中に入れて、彼女の美しい顔に寛大な微笑を浮かべたりしました。庭師の言葉は、詩のようだったり、美しい音楽のように、彼女の耳には聞こえました。

次の数ヶ月、庭師は早朝に秘密の邸宅に来ました。それは、太陽が出たり、王女が眠りから起き上がる前でした。毎日、彼は庭から最も美しく、甘くにおう花の花束を摘んで、召し使いに渡しました。彼女はそれを、眠っている王女のそばの、大きな花瓶にさしました。

王女が日の出に起きると、庭師の花束からの美しい香りが、彼女の感覚に満ち溢れ、彼女のベッドのわきの美しい花の光景は、彼女の顔に温かな微笑をもたらしました。今や、彼女には、毎日ベッドから起きる、もっともな理由ができました。

しばしば、朝食をとらず、王女はすてきな庭師に挨拶するために、庭に急ぎました。そして彼らは何時間も、何時間も話、しばしば時がたつのを忘れていました。ただ、太陽が地平線に沈む時、王女は彼らが一日中話すのに使って、庭師は自分の村に帰らなければならないことに気付くのでした。

いったん庭師が邸宅を出ると、王女はできるだけ早く寝て、彼女は次の朝が早く来て、庭師とまた会話が始められるのを待っているのです。

時が過ぎて、王女と庭師は必然的にお互い恋に落ちました。そして、こちらも必然的に、スルタンは買えらの不法な関係について聞きました。彼は

憤慨し、彼がすぐに関係をやめさせ、占い師の預言が悲劇的に実現することを中止させなければならぬと、知ったのです。

ある日、庭師と王女は美しく回復した庭で、毎日の会話を楽しんでいましたが、召し使いが恐怖の表情で邸宅の中心の門を通して、急いでやってきました。彼女はスルタンと女王の宮殿からずっと走ってきたのです。彼女は庭師の所へ来て、王女から引き離そうとしました。「あなたは出てゆかなければなりません。あなたはここから出てゆかないと。そして、帰ってきてはいけません。」と彼女は叫びました。

「どうしたんですか、」混乱した王女が聞きました。

むせび泣く召し使いは、スルタンが庭師のことを知り、彼を逮捕するために、兵士たちを送ってきていることを、説明しました。

「私の父は、私のたった一人の恋人を私から奪うような冷酷な人ではありません。」と王女は言いました。彼女は庭師の方に振り返りました。「来てください。一緒に走って逃げましょう。この場所から遠い所へ。」

しかし、庭師は悲しそうに頭を抱えました。「私たちがどこへ走っても、あなたの父は、最終的には私たちを見つけるでしょう。隠れる場所はありません。」彼は王女の手で暖かな口づけをしました。そして、出てゆくために振り返りました。「私はあなたを残さなければなりません。そして、もうあなたを見ることはできません。もしあなたの父が私を罰しないなら、私は貧しい庭師をするしかありません。しかし、あなたは、大切な、私の美しい王女です。」

王女は目に涙をうかべて、庭師に走りより、彼を暖かく抱きしめました。「あなたは私の、この世でただひとりの愛する人です。私はあなたを私から離すようなことはしません。私にはあなたが必要です。」

しかし、庭師が答える前に、城の門が蹴り開けられて、スルタンの宮殿から兵士たちが押し入り、彼を逮捕しました。彼らは邸宅から彼を引きずり出し始めました。

「彼を放しなさい。私たちをほっといてください。」召し使いは、彼女を抑えた時、泣きじゃくる王女は金切り声を出しました。

フィリピンの神話と伝説

庭師は大きな花のベッドの上を引きずられた時、即座に一握りの花をつかみ取り、それを王女に渡し、彼女は震える手で、それを受け取りました。

庭師は王女に叫びました。「その花を私たちの庭に埋めてください。私はいつもあなたのそばに居ることを約束します。」兵士たちは、庭師を邸宅から引きずり出し、門をピシャリと閉めました。

泣きじゃくる王女は庭の真ん中にひざまずき、庭師の花束を彼女の胸に握りしめました。彼女は庭師の言葉を思い出し、手で地面に穴を掘り、その花束を埋めました。彼女の涙のしずくは、目から落ちて、掘った地面を濡らしました。

次の日、王女は庭に座って、庭師の運命を考えました。彼女の召し使いは、悲しい知らせを持って、スルタンの宮殿から帰ってきました。庭師は王女との不法なつながりのために、絞首刑にされていました。

プトリ・ツンバ・ナミは、困惑しました。彼女は庭から泣きながら走って、金切り声を出しました。彼女は自分の部屋へ走り、戸に鍵をして、ベッドの上でくずれて、泣きじゃくり、叫びました。彼女はひどく泣いて、ついには深い眠りに入りました。

次の朝、王女が目覚めると、彼女は、空気中をとて甘い香りがしているのに気づきました。うれしくさせるような匂いが庭からやってきました。

王女は服を着て、彼女の部屋を出て、庭へ急ぎました。そこは甘いにおいがとても強いのです。庭の中央で、王女は美しいにおいの根源を見つけました。彼女が二日前に庭師の花束を埋めた場所でしたが、今は、輝く白い花を持つ、不思議な植物があり、甘い香りを放っていました。

微笑んだ王女は白い花をいくつか摘んで、胸の近くに抱きました。「あなたなのね、恋しい人。私にはあなただとわかります。いつも私と一緒にいてくれる、という約束を守ってくださいね。」

ついに、プトリ・ツンバ・ナミは、父のスルタンが病気になるまで死んだ時、その地の女王になりました。彼女が宮殿に着いた時、彼女が行った最初の仕事は、甘くにおう白い花を宮殿の庭に植えることでした。そして、また宮殿の兵士たちに命じてこれらの白い花をその土地中に植えさせました。そしてどこでも、新しい女王が行く所では、白い花の香りと光景が、いつも彼女のそばにあり

ました。

彼女は召し使いたちに、毎朝夜明けに、その白い花を摘んで、宮殿のひとり部屋にはすべて、花瓶にそれを生けるように、特に彼女の寝室の内側にはそうするように命じました。毎日、広い宮殿は白い花の良い香りで満ちて、それは、短い期間であつたけれど、彼女の生活を大変幸せにした、恋人である素朴な庭師を、つねに女王に思い出させるものでした。

新しい女王は結婚することはありませんでした。しかし、彼女はきわめて幸せであり、彼女の生涯を人々の良い暮らしのために、ささげました。毎日、彼女は白い大きな花束を持って、モスクへ行き、彼女に幸せを与えたアラーにそれをささげました。そして、毎日彼女は、アラーにいつの日にか、来世において、彼女の亡くした、庭師を見つける機会を与えてくれるように願っていました。

長い年月が過ぎて、女王の仕えた人々とその地は良くなり、彼女は病気になるまで、穏やかに死にました。彼女は、耐える痛みもなく、顔に笑みをうかべて、亡くなりました。ですから、ついに彼女は庭師に永遠に出会えたということでしょう。

良い香りの白い花は、「ダマ・デ・ノケ」といわれ、今日まで女王の地全体にずっと繁茂しています。そして、それらは今も、国中のモスクでアラーのためにささげられています。それはまた、女王の生涯を変えさせた、素朴な庭師への永遠の愛の、女王の物語を思い出させるものでもあります。